



## 特記事項

- 新規インストールおよびアップグレード時のデフォルト CA 証明書 (1 ページ)
- 無効なデフォルト 証明書 バックアップの失敗 (1 ページ)
- ILS ネットワーキング キャパシティ (2 ページ)
- Okta 経由の RTMT への SAML SSO ログインの Java 要件 (2 ページ)
- 同じコールでサポートされていない複数のクロック レート (3 ページ)
- 新しい Cisco ゲートウェイのサポート (3 ページ)
- SDL リスニングポートの更新には、すべてのノードで CTIManager を再起動する必要がある (5 ページ)
- 輸出規制対象のお客様向けのサテライトの導入を使用した輸出規制 (5 ページ)
- IM and プレゼンス リリース 11.5 (1) 以降からのデータベース スキーマのアップグレード (5 ページ)
- 応答しないリモート クラスタ ノード (7 ページ)
- Cisco Tomcat サービスの再起動 (7 ページ)

## 新規インストールおよびアップグレード時のデフォルト CA 証明書

Unified Communications Manager リリース 12.5 (1) 以降をインストールすると、CAP\_RTP\_001 と CAP\_RTP\_002 証明書を除くすべてのデフォルト CA 証明書が存在します。これらの証明書を有効にするには、`set cert default-ca list enable {all | common-name}` コマンドを使用します。

Unified Communications Manager リリース 12.5(1) 以降にアップグレードする場合は、アップグレード後に古いバージョンに存在していたデフォルトの証明書のみが表示されます。

## 無効なデフォルト 証明書 バックアップの失敗

ディザスタリカバリシステム (DRS) を使用してバックアップを実行する場合、`set cert default-cal-list disable {all | common-name}` を使用してすべてまたは特定のデフォルト証明書が

無効になっている場合、バックアップに無効な証明書が含まれていません。新規にインストールされたサーバでバックアップを復元すると、それらの無効な証明書が再度表示されます。

## ILS ネットワーキング キャパシティ

Intercluster Lookup Service (ILS) ネットワーク容量は、リリース 12.5(x)以降で更新されています。ILS ネットワークを計画する際に念頭に置くべき推奨キャパシティは以下のとおりです。

- ILS ネットワーキングは最大 10 個のハブ クラスタをサポートしており、ハブあたりのスポーク クラスタ数は 20 個であるため、合計で最大 200 個のクラスタを使用できます。ハブとスポークの組み合わせによるトポロジは、各クラスタ内で多数の TCP 接続が作成されるのを回避するために使用します。
- ハブ クラスタとスポーク クラスタを最大数まで、またはそれを超えて使用すると、パフォーマンスに影響が出る可能性があります。1つのハブに多数のスポーク クラスタを追加すると余分な接続が作成され、メモリまたは CPU の処理量が増加する可能性があります。1つのハブ クラスタに接続するスポーク クラスタは 20 個以下にすることを推奨します。
- ILS ネットワーキングは、追加の CPU 処理をシステムに追加します。ハブアンドスポーク トポロジを計画する場合は、ハブクラスタの CPU が負荷を処理するように設定されていることを確認します。CPU 使用率の高いシステムをスポーククラスタとして割り当てることをお勧めします。



(注) 上記の容量は、システムテストに基づく推奨事項にすぎません。Unified Communications Manager は、ILS ネットワーク内のクラスタの総数にも、ハブあたりのスポーククラスタ数にも制限を適用しません。上記のトポロジは、システムが過度にリソースを消費しないように、最適なパフォーマンスを保証するためにテストされています。

ILS の詳細については、[Cisco Unified Communications Manager システム設定ガイド](#)の「クラスタ間ルックアップサービスの設定」の章を参照してください。

## Okta 経由の RTMT への SAML SSO ログインの Java 要件

Okta が id プロバイダーとして設定されている SAML SSO があり、SSO を使用して Cisco ユニファイドリアルタイムモニタリングツールにログインする場合は、最小 Java バージョン 8.221 を実行する必要があります。この要件は Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence Service の 12.5(x) リリースに適用されます。

# 同じコールでサポートされていない複数のクロックレート

このリリースでは Cisco TelePresence エンドポイントと Cisco Jabber クライアントは、提供されたコーデックに一致するさまざまなクロックレートの複数の「電話イベント」 SDP 属性をサポートしていません。この機能は、VoLTE/IMS エンドポイントを完全にインターワーキングするために必要です。この更新のため、これらのエンドポイントタイプと VoLTE または IMS エンドポイント間の相互運用性の問題が、8 kHz の異なるクロックレートがネゴシエートされる通話中の再招待で発生する可能性があります。

これらのエンドポイントクラス間のコールの場合:

- 最初のコールセットアップは問題なく実行されます。
- 通話中の再招待では、INVITE が Unified Communications Manager によって開始された場合、問題は発生しません。
- エンドポイントによって開始された再招待では、8 kHz とは異なるクロックレートを使用すると、相互運用性の問題が発生する可能性があります。

## 新しい Cisco ゲートウェイのサポート

Unified Communications Manager の新しいリリースでは、次のシスコゲートウェイのサポートが導入されています。

- Cisco VG400 アナログ音声ゲートウェイ
- Cisco VG420 アナログ音声ゲートウェイ
- Cisco VG450 アナログ音声ゲートウェイ
- Cisco 4461 サービス統合型ルータ

次の表に、サポートが導入されたゲートウェイモデルと、リリースカテゴリ別の最初のリリースを示します。各リリースカテゴリ（たとえば、11.5(x)、12.5(x)）内では、ゲートウェイモデルのサポートは、そのカテゴリの後のリリースとともに、指定されたリリースとともに追加されます。これらのリリースでは、Cisco Unified Communications Manager の [ゲートウェイの設定 (Gateway Configuration)] ウィンドウでゲートウェイを選択できます。

表 1: リリース カテゴリ別の最初のリリースを使用する Cisco ゲートウェイ

ゲートウェイ モデル	11.5(x) リリース	12.5 (x) リリース	14(x) リリース
Cisco VG 202、202 XM、204、204 XM、310、320、350 アナログ音声ゲートウェイ	11.5(1) 以降	12.5(1) 以降	14 以降
Cisco VG400 アナログ音声ゲートウェイ	11.5 (1) SU7 以降	12.5(1) 以降	14 以降
Cisco VG420 アナログ音声ゲートウェイ	サポート対象外	12.5(1)SU4 以降	14SU1 以降
Cisco VG450 アナログ音声ゲートウェイ	11.5 (1) SU6 以降	12.5(1) 以降	14 以降
Cisco 4321、4331 4351、4431、4451 サービス統合型ルータ	11.5(1) 以降	12.5(1) 以降	14 以降
Cisco 4461 サービス統合型ルータ	11.5 (1) SU6 以降	12.5(1) 以降	14 以降
Cisco Catalyst 8300 シリーズエッジプラットフォーム	—	12.5(1)SU4 以降	14 以降

### Cisco アナログ電話アダプタ

Cisco アナログ電話アダプタは、アナログ電話機、またはファックスなどのアナログ デバイスをネットワークに接続します。これらのデバイスは、[電話の設定 (Phone Configuration)] ウィンドウを使用して設定できます。次の表では、ATA シリーズのモデル サポートを取り上げています。

表 2: Cisco アナログ電話アダプタ

ATA アダプタ	11.5(x) リリース	12.5 (x) リリース	14(x) リリース
Cisco ATA 190 アナログ電話アダプタ	11.5(1) 以降	12.5(1) 以降	14 以降
Cisco ATA 191 アナログ電話アダプタ	11.5(1)SU4 以降	12.5(1) 以降	14 以降

## SDL リスニングポートの更新には、すべてのノードで CTIManager を再起動する必要がある

SDL リスニングポートサービスパラメータの設定を編集する場合、サービスが実行されているすべてのクラスタノードでCisco CTIManagerサービスを再起動する必要があります。現在、ヘルプテキストにはサービスを再起動するように指示されていますが、サービスが実行されているすべてのノードでサービスを再起動する必要があるとは指示されていません。Cisco Unified CMの管理インターフェイスから、このサービスパラメータにアクセスするには、システム > サービスパラメータに進み、Cisco CTIManagerをサービスとして選択し、[詳細(Advanced)]をクリックしてCTIManagerサービスパラメータの完全なリストを表示します。

このアップデートは [CSCvp56764](#) の一部です。

## 輸出規制対象のお客様向けのサテライトの導入を使用した輸出規制

Unified Communications Managerサテライトの導入（サテライトバージョン：7-202001）を使用して、輸出規制対象のお客様が Unified Communications Manager で輸出規制機能を有効にできるようサポートします。『[Cisco Unified Communications Manager システム設定ガイド](#)』の「スマートライセンスの輸出コンプライアンス」の章で「スマートソフトウェアライセンスの概要」のセクションを参照してください。サテライトの詳細については、<https://software.cisco.com/download/home/286285506/type/286285517/os> を参照してください。

## IM and プレゼンス リリース 11.5(1) 以降からのデータベーススキーマのアップグレード

IM and Presence Service を使用して外部データベースとして導入された Microsoft SQL データベースがある場合は、次のいずれかのシナリオを選択してデータベーススキーマをアップグレードします。

表 3: MSSQL データベーススキーマのアップグレードシナリオ

シナリオ	手順
IM and Presence Service 11.5 (1)、11.5 (1) SU1、または 11.5 (1) SU2 リリースからのアップグレード	<p>MSSQL データベースのアップグレード方法の詳細については、『<a href="#">IM and Presence Service データベースセットアップガイド</a>』の「Microsoft SQL Server を使用したアップグレードに必要なデータベース移行」セクションを参照してください。</p> <p>これにより、テキストから nvarchar (最大) の列タイプに必要な変更が行われます。</p>
IM and Presence Service 11.5(1)SU3 以降からのアップグレード	<p>IM and Presence Service サーバーに接続されている MSSQL データベースは、IM and Presence Service のアップグレード中に自動的にアップグレードされます。これにより、nvarchar (4000) から nvarchar (最大) までの列タイプに必要な変更が行われます。</p> <p>(注) 列タイプが nvarchar (4000) の古いデータベースに接続するなど、何らかの理由でアップグレードを手動でトリガーする場合、次のアクションは列タイプを nvarchar (最大) に変更することによってデータベースをトリガーしてアップグレードします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Cisco xcp Config Manager を再起動した後、Cisco XCP Router サービスを再起動します。または</li> <li>• 外部データベースのスキーマ検証中：データベースをテキスト会議 (TC)、メッセージアーカイバ (MA)、または非同期ファイル転送 (AFT) サービスに割り当て、<b>[外部データベース設定 (External Database Settings)]</b> ページをリロードします。(Cisco Unified CM IM and Presence 管理ユーザーインターフェイスから、<b>[メッセージング (Messaging)]</b> &gt; <b>[外部サーバーの設定 (External Server Setup)]</b> &gt; <b>[外部データベース (External Databases)]</b> の順に選択し、データベースを見つけて選択して <b>[外部データベースの設定 (External Database Settings)]</b> ページをロードします)。</li> </ul>

# 応答しないリモートクラスタノード

## 問題

リモートクラスタのすべてのノードが一度にダウンします。

## 説明

上記の問題が発生した場合は、

- 2つのクラスタはそれぞれ4つのノードを持っていて、両方のクラスタのすべてのノードがUDSに設定されています。
- クラスタ2は、クラスタ1ビューでパブリッシャFQDNとともに定義されています。反対に、Jabberユーザはクラスタ1としてホームクラスタを持ちますが、SRVはクラスタ2をポイントし、クラスタ2はクラスタビューでクラスタ1からのパブリッシャのFQDNがコンフィギュレーションされ、到達可能になったときに最初に更新される [RemoteClusterServiceMapDynamic] テーブルのエントリをすべて保持します。
- クラスタ2の [RemoteClusterServiceMapDynamic] でクラスタ1の3つのノードすべてが停電により一度にダウンした場合、新しいJabberのログインはホームクラスタの検出に失敗します。
- ノードがダウンしていても、クラスタ2の RemoteClusterServiceMapDynamic は以前のIPを表示し続けます。
- クラスタ2では、 [RemoteClusterServiceMapDynamic] からノードが順番に、または1つダウンした場合に、リスト内の次のノードのエントリがUDSアクティブによって更新されます。

問題は、 [RemoteClusterServiceMapDynamic] からの3つのノードすべてが停電によりダウンした場合、4番目のノードが [RemoteClusterServiceMapDynamic] に追加されていないことです。ただし、クラスタ2の応答可能なクラスタビューをクラスタ1のアクティブなサブスクライバーにポイントする場合、 [RemoteClusterServiceMapDynamic] が自動的に更新されます。

## ソリューション

クラスタビューから非アクティブなリモートノードを削除して、アクティブノードを追加します。

このアップデートは [CSCvq5867](#) の一部です

# Cisco Tomcat サービスの再起動

Security Assertion Markup Language シングルサインオン (SAML SSO) を有効または無効にした後、Cisco Tomcat サービスを再起動することをお勧めします。





## 翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。